



SUCRA さくら  
学術情報発信システム / 埼玉県地域共同リポジトリ

Institution	文教大学
Title	家政学と家庭生活論
Author	福田, はぎの
Citation	新版家政学事典 (日本家政学会編, 朝倉書店, 2004.7)p.5- 6
URL	<a href="http://sucra.saitama-u.ac.jp/modules/xoonips/detail.php?id=BKK0000986">http://sucra.saitama-u.ac.jp/modules/xoonips/detail.php?id=BKK0000986</a>

- SUCRA に登録されているコンテンツの著作権は、執筆者、出版社(学協会)などが有します。
- SUCRA に登録されているコンテンツの利用は、著作権法に規定されている私的使用や引用などの範囲内で行ってください。
- 著作権法に規定されている私的使用や引用などの範囲を超える利用を行う場合は、著作権者の許諾を得てください。ただし、著作権者から著作権等管理事業者(学術著作権協会、出版者著作権管理機構など)に権利委託されているコンテンツの利用手続きについては、各著作権等管理事業者に確認してください。

### 1.1.7 家政学と家庭生活論

a. 家庭生活の変容 家庭生活は時代や社会とともに変化する。人間生活のなかでも特に家庭生活に価値的根拠をおき、家庭生活のための実践科学である家政学がその本質的能力を維持・向上させるためには、客観的で体系的かつ時代と社会の変化に対応してたえず更新される家庭生活論をもつことが基本的必要条件である。実際に、これまで家政学は家庭生活を人的側面では第一次集団としての家族、物的側面では人間の自然性に根ざしかつ文化そのものでもある衣食住生活、さらに行為的側面からは時間、金銭、労役などの適正配分を実現する家庭経営といった特定の人、モノそして行為からなる多側面的構成体として把握してきた。家政学の領域構成が家族関係、被服、食物、住居、児童、家庭経営などに区分されているのもこの把握法に対応している。家政学の体系は現実の家庭生活総体の存立構造に自らの根を下ろしているのである。しかしまたそれだけに、近年の家庭生活に進展している次のような諸事実には、家政学全体のあり方に一定の改変を迫るものがある。

近年の家庭生活には夫婦や親子の空間的、時間的、物的相互関係にさまざまな変容が現れている。家族が家庭とともに過ごす機会が減少する一方、そこでともに過ごされる時間も家族集団というより家族成員各人の志向性優位な個人主義的拡散傾向を示し、空間も共同的というより占有による排他性優位傾向を示している。「家庭のない家族の時代」（小此木啓吾）という警告にもかかわらず、互いに夫婦や親子であっても個々人が精神的にも物質的にも集団的満足への途を見失い、夫と妻、親と子が自然に共同的に達成する充足関係を希薄化し、家庭がコンテナ（容器）化する傾向はその後も弱まっていない。家庭が演技のような不自然さの文脈となれば、家族役割の遂行も個人主義的心理的強制下のストレスとなる。育児ノイローゼや「よい子」という精神病理現象は現代の病む家庭の象徴である。そしてこれらの家族関係側面でとらえられる変容も、具体的場面においては個食・孤食をはじめとする衣食住など家庭生活という時間と空間の個人主義化として進行している。つまり家庭生活において人とモノそして時間、空間の関係に反統合というべき変化が生じている。モノの商品化が深化している現在、人とモノの関係の変化は当然、人と金銭の関係にも連動する。

さらに社会的広がりにおいてみれば、家庭生活に浸透する市場経済が衣食住生活の外部化（サービス経済化、社会化）により促進する家庭生活の空洞化や個人主義化、モノばかりでなくサービス商品化された人間労働を市場競争原則下に不断に創出・廃棄する高度情報化社会がもたらすストレスが家庭生活に与える深刻な影響など、家庭生活に直接・間接にかかわる現代社会の諸傾向は枚挙に暇がない。家庭機能低下という現象も、実はこうした問題に無意識なままで社会の動きのなかに放置されている家庭生活を発生基盤としている。そしてこれらの事実からも人、モノ、金銭、サービス・役務などが構成要素として複合的相互関係を展開するなかで現代の家庭生活が変容しつつあることが

十分示唆されている。ところでこうした家庭生活の変容は、これまで家政学が根を下ろしていた現実の基盤に発生している変容にはかならない。それが何よりもまず領域別側面的アプローチを超える研究方法を家政学に要求していることは明らかである。人的、物的、経営的各側面は実態においてそれぞれ自律的ではなく、すでに全体的な構造的変化をもたらす複合的諸要因へと転化しているからである。家政学と家庭生活の関係は一定の激動期に入っている。

b. 現代家庭生活論と家政学 家政学にはこれまでに対象・モノに即した科学・知識一般の高度分化に沿った専門領域の細分化が進展した。専門領域内の独自課題が追究されるほど、家庭生活という共通基盤が曖昧になり、それゆえこの基盤に発生している問題を共有しようとする家政学の求心力にも減退傾向が進展した。それは家庭生活の実態とは異なる文脈においてであるが、基盤としての家庭生活論の喪失と研究の領域別個別化という意味では、空洞化と個人主義化がこの研究・教育分野をも包摂しつつ進展したことを示している。こうした傾向内にとどまるかぎり当然、家政学の課題としての家庭生活論は容易に姿を現さない。

現代の高度科学技術世界において知識開発の専門領域内細分化とグローバル化はすっかり定着している。特に自然科学分野の知識には基本的に国境がない。一方、家庭生活論にはこれらとは逆の科学のあり方が求められる。細分化に対して家庭生活を焦点とする専門領域の統合化が、またグローバル化に対しては地域志向が必要とされる。後者に関しては、家庭生活とは元来各国各地の風土や歴史の所産という文化的視点から、さらに今後は世帯という枠を超えて子どもや高齢者を支え合う家庭生活のあり方が求められるという意味で市民的協力の視点から地域志向が不可欠だからである。しかし細分化と統合化、グローバル化と地域志向はともに必ずしも二律背反的關係にあるとはいえない。しかしこれらが相補關係を形成するには片方を欠くことができない。家政学が家庭生活論をもつことは自ら統合力を高め、地域基盤をもつことに通じる。

現実の家庭生活と研究分野としての家政学は、それぞれ別の途をたどりながらも、今や少なくとも客観的には相互に必要とし合う關係に入りつつある。元来多側面的な家庭生活が社会と時代の変化のなかで動揺するとき、その構造転換はおのずと複雑な過程を示す。人(家族)、モノ(衣食住)、行為(家庭経営)はそれぞれの側面を乗り越え互いに結び付き、あるいは離反しながら、それぞれが構造転換の要因として複合的な相互作用關係に転じる。こうした家庭生活に対し家政学が依然として領域別側面的アプローチをとることは時代錯誤であろう。一方、家政学の側からは、分野としての統合と地域視点の導入において改めて家庭生活論を必要としている。また、現実の家庭生活が研究界に支援を求める状況にあることもこの際決して無視できないであろう。現代家庭生活論の構築は家政学が現実の家庭生活と新たな關係に入ることであり、同時に、家政学が自らの再構築過程に乗り出すことでもある。

(福田はぎの)